学苑・人間社会学部紀要　No.772　11～20　(2005・2)

〔論　文〕

異性の対人魅力に対する社会的望ましさと類似性の効果：調整要因としての関係期間[1)2)]

藤　島　喜　嗣

Effects of Social Desirableness and Similarity on Interpersonal Attraction of the Opposite Sex: Involvement period of relationships as a moderator

Yoshitsugu FUJISHIMA

The present study investigated whether the involvement period of relationships with the opposite sex might moderate the effects of social desirableness of a target person and similarity between the target and a perceiver on interpersonal attraction. One hundred and two female undergraduates rated themselves on 15 dispositions and received personal profiles of a male person, which varied in social desirableness of his dispositions and assumed involvement period of relationships. They reported interpersonal attraction of the target male person on IJS(Byrne, 1971). Results show that social desirableness and similarity influenced interpersonal attraction of the target male independently. The moderating effects of involvement period of relationships were not found. Involvement period of relationships had unique effects on interpersonal attraction of socially desirable males. The implications of the independent effects of social desirableness and similarity, and the sex differences on the impact of involvement period were discussed.

Key words: interpersonal attraction (対人魅力), social desirableness (社会的望ましさ), similarity (類似性), involvement period of relationships (関係期間)

問　題

本研究は，評価者が前提にする関係の継続期間に注目し，刺激人物の性格および外見の社会的望ましさと評価者との類似性が刺激人物への好意度（対人魅力: interpersonal attraction）におよぼす影響を検討する。特に，本研究では，青年期における生活適応上，大きな意味を持つと考えられる，異性間の対人魅力を検討する。

社会的望ましさの効果　対人魅力には，性格，外見が影響すると考えられる。これらの特徴には社会，文化的に規定されている側面があると考えられる。これまでの研究から，社会的に望ましいとされる性格，外見が存在することが指摘されている。これらを備えた人物は，他者から好意的に見られやすい。Anderson (1968) は，555個の性格特性語を100名の大学生に判断させた。その結果，「誠実」「正直」「ものわかりのよい」などの性格が好まれ，「嘘つき」「見かけ倒し」「卑劣」などの性格が好まれていなかった。日本でも類似の検討がなされている。青木 (1971) は，455個の性格表現語に関して男女大学生と20代および40代の勤労者に調査を行った。その結果，「努力」「忍耐」といった側面を重視するという日本特有の傾向があるものの，全般的にはAnderson (1968) のものと類似した結果が得られている。他にも，詫摩 (1973)，松井 (1991) が同様の

調査を行い，類似した結果を得ている。

外見に関しても，望ましい容貌，容姿が社会，文化的に規定されており，生物学的に規定されている部分もある。このような身体的魅力は，異性間の対人関係において，特に大きな影響力を持つと考えられる。Buss（1989，1994）は，世界の37地域で質問紙調査を行った結果から，どの地域においても異性の選択において外見が重要である事を明らかにしている。Walster，Aronson，Abrahams，& Rottman（1966）は，事前評定によって学生の身体的魅力を高，中，低の3群にわけ，その水準に関して無作為に男女を組み合わせてダンスパーティを開催した。その結果，男女とも自分の魅力度の水準に関係なく，ダンス相手の魅力度が高いほど相手に好意を感じ，デートをしたいと感じていた。Landy & Sigall（1974）は，男子大学生に対して，女子学生が書いたとされたレポートを採点するよう求めた。この際，レポートの出来と書き手の女性の外見に関する情報が操作された。その結果，外見が望ましい場合には，レポートの出来に関わらず全体的評価は高いままであったが，外見が望ましくない場合には，出来の悪いレポートに関して，非常に厳しく評価されるようになっていた。これらの研究は，外見の社会的望ましさが対人魅力を規定しており，その他の評価，判断にも波及しうることを示している。

類似性の効果　性格や外見の社会的望ましさが対人魅力に影響をおよぼすと指摘される一方で，態度や性格，外見に関する自分と他者との類似性が対人魅力に影響するとする知見も存在する。この類似性の効果は，社会的に望ましくない属性の持ち主が，同様に社会的に望ましくない属性の持ち主を好意的に評価する可能性を示唆しており，社会的望ましさに関する知見と対立する側面がある。

社会的望ましさとの関連が薄い，態度（attitude）に関しては，類似性の効果が認められることがわかっている（Byrne，1971）。Byrne & Nelson（1965）は，大学生を実験参加者として研究を行い，態度の類似性と相手が抱く魅力との間には直線的な正の相関関係があることを報告している。また，Newcomb（1961）のフィールド研究においては，入寮後3ヶ月後になると，寮における近接性に関係なく，態度の一致している相手への魅力が高まることを見いだしている。さらに，Griffitt（1966）は，理想自己について類似した他者が，非類似の他者よりも好まれることを見いだしている。

性格に関しては，類似性効果が一部認められるものの，その結果は混乱している。Hendrick & Brown（1971）は，内向的な学生と外向的な学生に，別な二人の他者が回答したと称する性格検査用紙を見せて，その人物の対人魅力評定をさせた。その結果，全体として内向的な他者より外向的な他者の方が好かれる傾向が見られたが，この傾向は外向的な学生において顕著であり，内向的な学生においては明瞭ではなかった。この結果は，対人魅力において，性格の社会的望ましさ（この場合は外向的な性格の方が内向的な性格よりも望ましいとされた）の影響と類似性の影響が同時に認められることを示している。中村（1984）においても，類似した刺激人物の方が，非類似の刺激人物よりも好まれることが見いだされている一方で，外向的な刺激人物が内向的な刺激人物よりも好まれることが示されている。他方，中里・井上・田中（1975）は，外向的な刺激人物が内向的な刺激人物に比べて著しく好まれ，性格の類似性は効果をおよぼさないことを見いだしている。

外見には，類似性効果を支持する知見が存在する（See for a review，Feingold，1988）。Silverman（1971）は，実際に劇場やバーでデートをしているカップルを観察した結果，カップルの身体的魅力に大きな開きがあることはまれであることを明らかにした。また，Shepherd & Ellis（1972）は，新婚カップルの顔写真を大学生の男女に評定させた結果，配偶者間の外見の望ましさに正の相関関係があることを報告している。

社会的望ましさが存在する性格や外見において類似性効果が認められる理由として，拒絶の恐怖（fear of rejection）があげられる（Berscheid，Dion，Walster，& Walster，1971；Murstein，1972；Huston，1973）。Murstein（1972）は，結婚相手の選択のような現実的状況では，相手から拒絶される可能性をコストとして考慮するため，そのような危険性の少な

い，自分と同程度の魅力を持っている相手にもっとも好意を感じるのだと主張している（釣り合い仮説）。

しかし，拒絶の恐怖にもとづく釣り合い仮説は，常に支持されているわけではない。性格においては中里ら（1975）の結果が示すとおり，社会的望ましさの効果が強く認められることがあるし，外見においても釣り合い仮説を支持しない結果が得られている。例えば，Hagiwara（1975）は，身体的魅力の低い女性は，同様に身体的魅力の低い男性でも交際相手として考慮する傾向が強いが，彼女たちが最も考慮するのは，やはりもっとも身体的魅力の高い男性であるとしている。松井・山本（1985）は，男子学生に10人の女性の写真を提示し，印象を評定させ，交際したい相手を1名選択させた。その結果，外見の望ましさが対人魅力を規定していたその一方で，釣り合い仮説の重要な変数である受容可能性知覚（すなわち，相手から拒絶されない可能性の知覚）は対人魅力とは全く関連していなかった。

拒絶の恐怖と関係期間との関連　以上の結果からわかるように，刺激人物と評定者との間における性格や外見の類似性効果（もしくは，釣り合い効果）は必ずしも明確ではなく，その場合には刺激人物の社会的望ましさの影響が強く認められている。このような社会的望ましさの効果と類似性効果の競合の原因として，拒絶の恐怖の強さが各実験で異なっている可能性が考えられる。

第一に，性格や外見における類似性効果は，日本人サンプルにおける研究で概して弱い（e.g.，中里ら，1975; Hagiwara, 1975; 松井・山本，1985）。拒絶の恐怖は，自己評価が脅威にさらされることを意味している。このとき，日本文化のような相互協調的自己観（Markus & Kitayama, 1991）の文化では自己評価を維持，高揚しようとする動機（自己高揚動機）が存在しないので，日本人サンプルでは拒絶の恐怖を感じてもそれに対処しようとしない可能性がある（北山・高木・松本，1995）。他方で，欧米文化のような相互独立的自己観（Markus & Kitayama, 1991）の文化では自己高揚動機が存在するので，拒絶の恐怖を感じた場合，それに対処しようとし，自分の性格や外見の望ましさと釣り合った異性の好意度を高く見積もることになるのである。この可能性については，相互独立的自己観の持ち主と相互協調的自己観の持ち主を研究対象とし，性格や外見の社会的望ましさの効果と類似性の効果を対比した研究を行うことで検証することが可能であろう。

第二に，社会的望ましさの効果が顕著に認められた研究の多くが，デートの相手のような短期的な関係を前提に刺激人物の対人魅力を検討していたのに対し（e.g., Walster et al., 1966; Landy & Sigall, 1974; 中里ら，1975; 松井・山本，1985），類似性の効果が認められた研究では，相対的に長期的な関係を前提に刺激人物の対人魅力を検討していた（e.g., Silverman, 1971; Shepherd & Ellis, 1972）ことが指摘できる。このことは，類似性効果の規定要因としての拒絶の恐怖が，刺激人物との関係期間を評定者がどう考えるかによってその強さが異なる可能性を示唆している。先行研究における結果の不明確さは，この関係期間による拒絶の恐怖の喚起度合いで説明できるかもしれない。つまり，一日だけのような短期的な関係では拒絶される恐れは喚起されづらいだろうと考えられる。なぜなら，そのような短期的な関係ではお互いに十分な人物評価ができる可能性が低く，決定的な評価を下されづらいと考えるだろうし，もし拒絶されたとしても，損失となるのは望ましい相手と過ごせないわずかな期間の空白のみである。その一方で，相対的に長期的な関係では，拒絶される恐れは喚起されやすいだろう。なぜなら，そのような長期的な関係では，十分な人物評価ができる可能性が高まり，互いに決定的な評価を下せる可能性が高まるし，長期にわたる関係性において相手から拒絶された場合には損失が大きくなる（少なくとも日数の損失は大きくなる）と考えられるからである。その結果，短期的な付き合いを前提とした場合では社会的望ましさの効果が，より長期的な付き合いを前提とした場合では類似性の効果が顕著になるかもしれない。この可能性については，評定者が前提にする関係の継続期間を操作した上で，刺激人物の性格および外見の社会的望ましさと評価者との類似性が刺激人物への対人魅力におよぼす影響を検討することが有効である。

本研究は，拒絶の恐怖の強さの問題に関してこの第二の可能性を重視し，心理学的実験による検討を行った。

方　法

実験参加者　昭和女子大学で一般教養科目「こころの科学」を受講する女子大学生102名が質問紙実験に参加した。平均年齢は18.66歳であった。

実験デザイン　2（関係期間: 長期 vs 短期）× 2（刺激人物の望ましさ: 高 vs 低）の被験者間 2 要因配置であった。これに刺激人物プロフィールが，望ましさの各条件内で 2 種類存在していた（後述）。

手続き　講義時間を利用して質問紙実験を実施した。質問紙は，実験デザインに応じて 8 種類用意し，各条件がほぼ同数になるよう配慮した上で，無作為に配布した。調査目的は，「異性に対する魅力の既定要因に関する調査」とした。回答はいずれも無記名で行った。実施時間は約10分から15分であった。

最初に，年齢および性別に関して回答を求めた。その後，性格および外見に関する自己評定を15項目に対し，「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」までの 7 件法で回答を求めた。この15項目は予備調査（$N=63$）によって魅力的と感じる異性の条件として上位にあげられたものであった。具体的な項目は，「明るい」「誠実である」「気が利く」「常識がある」「やさしい」「話し上手である」「頭がよい」「寛大である」「お金を持っている」「おしゃれである」「体格がよい」「おもしろい」「思いやりがある」「外見がよい」「身長が高い」であった。

次に，実験刺激人物のプロフィール呈示を行った。まず，「あなたと同世代のある男性について彼の知人が実際に回答した意見をお見せします」と教示した。そのうえで，前提とする関係期間を長期もしくは短期のいずれかと考えるように教示した。長期条件では「長期間付き合うことが前提で，その後も個人的に何度も会う可能性が非常に高い状況（例えば，友人に彼氏彼女として付き合うことを前提に男性を紹介された場合など）」と教示した。他方で，短期条件では「一日だけの付き合いが前提で，その後も個人的に会う可能性が非常に低い状況（例えば，合コンで一度だけ遊ぶ場合など）」と教示した。刺激人物は自己評定で使用したものと同じ15項目に関する評定プロフィールを示す形で呈示した。望ましさ高条件では評定の平均値が 6 となるように，望ましさ低条件では平均値が 3 となるように，あらかじめ無作為に評定値を作成した。誰かが記入したように見せるべく質問紙に手書きで評定を書き入れた上で，評定を線で結び評定プロフィールとして分かりやすくなるように工夫をした。このような刺激を望ましさ高条件，望ましさ低条件それぞれ 2 パターンずつ作成し，質問紙ではいずれかを呈示した。

最後に，対人判断尺度（IJS: Byrne, 1971）を用いて刺激人物への好意度を測定した。この尺度は，他者に対して，知能，時事問題の知識，道徳性，適応力，個人的感情，実験への参加の 6 項目を 7 件法で評価する尺度であった。そのうち，個人的感情と実験への参加の評定を好意度として使用した。また，山本・松井・山成（1982）によって作成された，自己の諸側面評価尺度にも回答を求めたが，本研究では使用しなかった。

結　果

自己評価の群分け　自己評定15項目の内的整合性を確認するため，クロンバックの α 係数を算出した。その結果，$\alpha=.83$となり，十分な内的整合性が示された。この自己評定15項目を合計したものを自己評価の指標とし，中央値（$Mdn=63.00$）で実験参加者を分割，各々を自己評価高群，低群とした。[3]

好意度に対する影響　次に，対人判断尺度における「個人的な感情」への回答と「実験で一緒に働くこと」への回答との間には非常に高い正の相関関係が認められた（$r=.77$, $p<.001$）。よってこの 2 項目への回答を平均し，好意度指標とした。各条件における好意度指標の平均値および標準偏差を表 1 に示す。この好意度指標に対し，2（関係期間: 長期 vs 短期）× 2（自己評価: 高 vs 低）× 2（刺激人物の望ましさ: 高 vs 低）の被験者間 3 要因の分散分析を行った。[4]

その結果，刺激人物の望ましさの有意な主効果が認められた（$F(1, 93)=61.19$, $p<.001$）。望ましい

表1　各条件におけるターゲットへの好意度の平均値

関係期間	長期		短期	
自己評価	高	低	高	低
望ましさ 高条件	5.05(1.01) $n=10$	4.88(.89) $n=16$	4.25(.94) $n=12$	3.96(1.03) $n=14$
望ましさ 低条件	2.77(.93) $n=13$	3.23(1.23) $n=11$	2.53(.97) $n=15$	3.25(1.11) $n=10$

註）好意度の範囲は1～7。得点が高いほどターゲット人物に好意的であることを示す。カッコ内は標準偏差。

刺激人物は，望ましくない刺激人物よりも好意を持たれていた（$M=4.52$ vs 2.90）。これは社会的望ましさの効果を示していた。一方，自己評価×刺激人物の望ましさの有意な交互作用効果も認められた（$F(1, 93)=4.05$, $p<.05$; 図1）。望ましさ高条件では自己評価による好意度の差は認められなかったが（低群: $M=4.45$ vs 高群: $M=4.61$; $F<1$），望ましさ低条件では，自己評価低群（$M=3.24$）の方が高群（$M=2.64$）よりも好意を抱いていた（$F(1, 93)=4.07$, $p<.05$）。見方を変えた場合，自己評価に関わらず，望ましい刺激人物は望ましくない刺激人物よりも好意を持たれていたが（自己評価低群: $F(1, 93)=16.94$, $p<.005$; 自己評価高群: $F(1, 93)=48.20$, $p<.005$），その差は自己評価低群の方が小さかった。この交互作用効果は，類似性の影響を示していた。

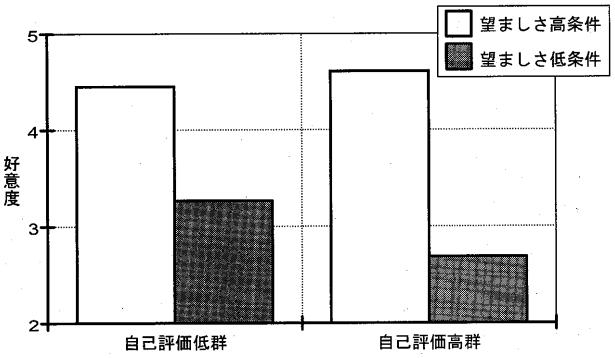

図1　自己評価×刺激人物の望ましさの交互作用パターン

また，関係期間の有意な主効果が認められた（$F(1, 93)=5.60$, $p<.05$）。長期条件（$M=4.00$）の方が短期条件（$M=3.47$）よりも刺激人物に好意を持っていた。さらに，関係期間×刺激人物の望ましさの有意に近い交互作用効果がみられた（$F(1, 93)=3.39$, $p=.07$; 図2）。望ましさ高条件においては，短期条件（$M=4.10$）よりも，長期条件（$M=4.94$）の方が，刺激人物を好意的に見ていた（$F(1, 93)=9.10$, $p<.005$）。他方，望ましさ低条件においては，このような差異は認められなかった（長期条件: $M=2.98$ vs 短期条件: $M=2.82$; $F<1$）。見方を変えると，関係期間に関わらず，望ましい刺激人物は望ましくない刺激人物よりも好意的に見られていたが（長期条件: $F(1, 93)=46.08$, $p<.005$; 短期条件: $F(1, 93)=18.13$, $p<.005$），刺激人物の望ましさの効果は関係期間が短期の場合よりも長期の場合により顕著であった。

3要因の交互作用効果は認められず（$F<1$），前提とする関係期間によって社会的望ましさと類似性の効果が異なるという予測は支持されなかった。

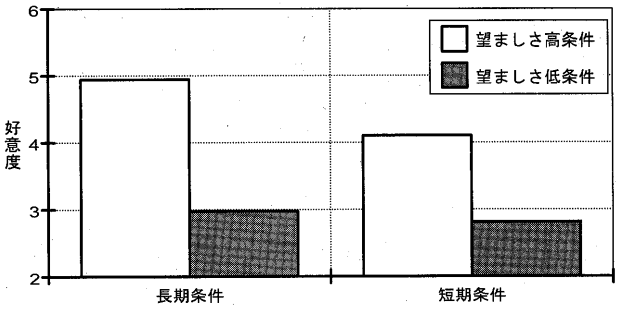

図2　前提とする関係期間×刺激人物の望ましさの交互作用パターン

自己評価と刺激人物の好意度との相関関係　対人魅力における類似性効果は，各実験条件内で自己評価の指標と刺激人物に対する好意度との相関係数を求めることでも検討可能である。望ましさ高条件においては，自己評価と刺激人物への好意度との間には正の相関関係が認められるはずであるし，他方で，望ましさ低条件においては，負の相関関係が認められるはずである。そこで，関係期間×刺激人物の望ましさからなる4条件内それぞれで，自己評価と刺激人物に対する好意度との相関係数を算出した。その結果を表2に示す。各条件における実験参加者数が不十分であるために，いずれの相関係数も有意にはならなかったが，予測と一致する方向の相関関係

が認められた。望ましさ高条件においては，長期条件（$r=.282$），短期条件（$r=.215$）のいずれにおいても正の相関関係が認められた。つまり，望ましい刺激人物に対しては，自己評価が高くなるほど，感じる好意度は高くなる傾向にあった。他方，望ましさ低条件において，長期条件（$r=-.379$），短期条件（$r=-.289$）のいずれにおいても負の相関関係が認められた。望ましくない刺激人物に対しては，自己評価が低くなるほど，感じる好意度が高くなる傾向にあった。望ましさの高低に関わらず，相関係数の絶対値は短期条件よりも長期条件の方が強かったが，いずれにおいても相関係数に有意差は見られなかった（望ましさ高条件：$\chi^2<1$；望ましさ低条件：$\chi^2<1$）。

表2　関係期間×刺激人物の望ましさの各条件でみた自己評価と好意度との相関関係

関係期間	長　期		短　期	
望ましさ	高	低	高	低
相関係数	.282	−.379	.215	−.289
有意確率	.162	.067	.292	.160

考　察

本研究では，関係期間に関係なく，社会的望ましさと類似性の効果が同時に認められた。全般的に社会的に望ましい属性を備えた男性は，備えていない男性よりも好ましく思われていた。他方，好意度評定に関して，社会的に望ましい男性では評定者の自己評価による違いが見られなかったものの，社会的に望ましくない男性では自己評価が高い評定者よりも低い評定者の方がその男性を好ましく感じていた。また，社会的に望ましい男性に対しては，自己評価が高まるほどその男性に対する好意度は高まっていたが，社会的に望ましくない男性に対しては，逆に自己評価が低まるほどその男性に対する好意度が高まっていた。このような社会的望ましさと類似性の効果が同時に認められ，好意度に対して加算的に影響する結果は，Hendrick & Brown (1971) や中村 (1984) と類似するものであった。

社会的望ましさの効果　社会的に望ましい異性に対し魅力を感じることは，直感的に考えても了解可能なものであり，自明なことのようにも思えるだろう。心理学的にも様々な視点からの説明が可能である。社会的に望ましい属性は，それ自体が快であるし，実際にその属性を持った他者と交際したときに，何らかの恩恵が期待できる。この恩恵には，我々の生存や社会的生活に関係する資源という意味の他にも，社会心理学的な恩恵も含まれる。例えば，身体的に魅力的な女性を同伴している男性は，社会的に高く評価される傾向があった(Sigall & Landy, 1973)。Cialdini, Borden, Thorne, Walker, Freeman, & Sloan (1976) は，社会的に高い評価を得ている人と近い関係にあることを強調することによって，自分の威光を高めることを「栄光浴」(basking in reflected glory) と呼んでいる。我々は，自らの社会的評価を高めるために，社会的評価の高い人とのつながりを緊密にしようと動機づけられ，それに伴ってそのような人物に魅力を感じるのである。

また，認知過程としても，バランス理論 (Heider, 1946, 1958) から説明が可能である。この理論は，主体である人 (P) を中心として，他者 (O) と，ある対象 (X) の三者関係に適用される理論である。人は，このP，O，Xの三者間が認知的にバランス関係にあるように動機づけられている。つまり，認知的一貫性を保つように動機づけられるのである。望ましい性格や外見をXとすれば，P−Xの感情関係が＋で（つまり，望ましい属性を人が好ましく思っており），またO−Xには単位関係が存在するとき（つまり，他者が望ましい属性を備えている場合），PがOに好意を抱くことによって（つまり，P−Oの感情関係を＋にすることによって），認知的に一貫したバランス状態を獲得するのである。逆に，P−Xの感情状態が−である場合（つまり，おそらく望ましくない属性を人が好ましく思っていない場合），O−Xに単位関係が存在するとき（つまり，他者が望ましくない属性を備えている場合），PはOに嫌悪を抱くことによって（つまり，P−Oの感情状態を−にすることによって），認知的に一貫したバランス状態を獲得するのである。

しかし，何が社会的に望ましい属性を規定しているのかに関しては議論が必要だろう。望ましいとされる性格特性に文化差が存在したことから示唆されるように（e.g.，青木，1971），社会的望ましさは普遍的でない側面がある。どのようにして社会的望ましさが規定されていくのかに関して，社会学的，経済学的な視点から，さらには文化心理学的な視点（e.g.，北山，1998）から捉える必要があるだろう。その一方で，望ましい属性が生物学的な意味合いから規定されることも考えられる。進化生物学的な観点からすると，特に異性の目から見た望ましい属性に関しては，性淘汰が働いている可能性がある。このような進化心理学的観点（e.g，Buss，1999；Buss & Kenrick，1998；長谷川・長谷川，2000；平石，2000；沼崎，2004）からの検討は，社会的望ましさに関するヒト普遍的な側面を明らかにすることが期待できる。いずれにせよ，個々人と社会とのダイナミクスを考えるマイクロ－マクロ問題としての問題提起がこれから重要となるだろう。

類似性の効果　本研究では類似性の効果も認められた。態度の場合と異なり，性格や外見には社会的望ましさが関連している。そのため，性格や外見の社会的望ましさそれ自体が対人魅力に影響するが，その一方で，自己の属性の望ましさとの釣り合いによって相手の望ましさの意味合いが異なってくるのである。

自己評価が高い人は，少なくとも主観的には自分は社会的に望ましい属性を備えていると考えている。そのため，相手を拒絶する可能性はあるとしても，相手から拒絶される可能性は低いと見積もると考えられる。その結果，自己評価の高い人は，社会的に望ましくない人物よりも社会的に望ましい人物に好意をはっきりと示すのである。これは，社会的望ましさの効果が明確に現れたのだと表現することが可能である一方で，自己評価の高い人物が，それに釣り合う人物に好意を示した類似性の効果とみることもできる。つまり，自己評価の高い人物では類似性の効果と社会的望ましさの効果は一致するのである。

他方，自己評価の低い人は，少なくとも主観的には自分は社会的に望ましい属性を備えていないと考えている。そのため，社会的に望ましい属性を自分より備えている人物から拒絶されてしまうかもしれないと感じるのである。その結果，社会的に望ましい人物に対して魅力を感じるけれども，拒絶の恐怖も同時に感じてしまい，その魅力が弱まって経験される，もしくは魅力を自ら下方修正するのかもしれない。社会的に望ましくない人物に対しては魅力を感じない一方，自らとの類似性を認知してしまうと考えられる。自分と類似する他者を低く評価することは間接的に自分の評価を自ら低めてしまうことになる。そのような自己への脅威を回避するために，社会的に望ましくない人物の魅力が強まって経験される，もしくは魅力を自ら上方修正するのかもしれない。自己評価の低い人においては，類似性の効果の方向と社会的望ましさの効果の方向とは一致しない。そのような状況で類似性の効果が認められたことは，類似性の効果が一定の強度を持っていることを示唆している。

拒絶の恐怖の意味合いを考えると，類似性の効果が認められたことは，対人魅力とは別の文脈で大きな意味を持つ。拒絶の恐怖への対処は，言い換えれば自己評価の維持，高揚を行おうとしたことになる。先述したとおり，日本文化のような相互協調的自己観の文化では，自己高揚動機が存在しないと考えられている（北山ら，1995）。本研究の結果は，このような相互協調的自己観の考え方と矛盾する知見であり，日本においても自己高揚的な歪みが存在しうることを示す点で意義がある。また，本研究の結果は，自己評価の低い人における自己評価の維持，高揚の存在を示したことになる。自己評価研究において，低自尊心の人は高自尊心の人と比べて自己高揚動機に動機づけられていないとする知見がある（e.g.，Beauregard & Dunning，1998; Swann，Stein-Seroussi，& Geisler，1992）。本研究の結果はこれらの知見とは必ずしも一致せず，自己評価の低い人（言い換えれば，低自尊心の人）でも自己高揚動機に動機づけられている可能性を示唆している。今後のさらなる検討が必要だろう。

関係期間の影響　本研究では，短期的な付き合いを前提とした場合では社会的望ましさの効果が，よ

り長期的な付き合いを前提とした場合では類似性の効果が顕著になるかもしれないと予測していた。しかし，実験からはそのような結果は得られなかった。長期条件でも社会的望ましさの効果が認められたし，短期条件でも類似性の効果が認められた。一般に類似性の効果よりも社会的望ましさの効果が強くなる（奥田，1997）ことを考えると，長期条件の結果は起こりうることかもしれないが，短期条件の結果は予想とは異なっていた。このような結果が得られた理由の１つとして，むしろ実験全体として拒絶の恐怖が高まりやすいような状況を設定してしまった可能性があげられる。本研究では，異性間の対人魅力を検討するために男性の刺激人物に対し，女性の実験参加者を用いた。男性よりも女性の方が，対人関係に関して過敏である可能性があり，そのため，拒絶の恐怖が全体的に高くなってしまったのかもしれない。そのような場合，関係期間が短期であったとしても拒絶の恐怖が高くなり，類似性の効果がみられることになると考えられる。

このような関係期間と性差の関係に関して，Kenrick, Groth, Trost, & Sadalla（1993）の知見は興味深い。彼らは，男女ごとに自己評定と相手に望む最低基準との相関関係を検討した。その結果，長期的な関係においては，男女とも自己評定が高いほど相手に対して望む最低基準が高くなっており，類似性の効果を示していた。他方，短期的な関係においては，女性では変わらぬ相関関係が認められたが，男性では自己評定と相手に対して望む最適基準との相関関係が認められなくなった。Kenrick et al.（1993）における女性データの知見は，本研究で得られた知見と整合するものである。

このような結果に対し，Kenrick et al.（1993）は，進化心理学的な視点から検討している。進化心理学の考え方では，異性間の対人魅力の問題は，恋愛・配偶行動につながることであり，繁殖に関連した問題と捉え直すことができる。この視点によると，長期配偶においては，男性，女性双方の投資量が多くなるために，配偶者選択の失敗は男女を問わずコストが大きくなる。そのため，対人魅力において釣り合い仮説にもとづいた類似性の効果が見られることとなる。他方で，短期配偶においては，配偶者選択の失敗によるコストは男性では女性に比べて圧倒的に小さくなる。女性においては妊娠に関わる問題は短期でも長期でも違いはないのだが，男性においては，短期的である場合は配偶機会を増やすという意味で，釣り合わない相手を選択しても利益を得ることができ，全体的コストが低減するのである。進化心理学が指摘するコストと，本研究が扱った拒絶の恐怖が同一のものであるかは議論の余地があるが，異性の対人魅力における類似性の効果を考える上で，Kenrick et al.（1993）の知見は今後有用だろう。

前提とする関係期間は，それ自体で異性の対人魅力に影響をおよぼしていた。短期的関係を考えるよりも長期的関係を考える場合に相手を好意的に捉えていた。この効果は，社会的に望ましくない刺激人物には生じず，社会的に望ましい刺激人物に対して生じていた。これは長期的な関係を考えたときに，関係性へのコミットメントが強く働き，将来に対する期待に動機づけられて，望ましい属性がより望ましく見えたのかもしれない。さらには，本研究で用意した評定形容詞において，短期的相手としてよりも長期的な相手として望ましい属性が多かったからかもしれない。これらについては，本研究の主たる目的と関連しないのでこれ以上の考察を避けるが，今後検討に値する重要な問題だろう。

註

1）本研究は，昭和女子大学文学部舘野郁美さんが筆者の指導のもとに収集したデータを筆者が再分析したものである。記して感謝します。

2）本研究の成果の一部は，日本心理学会第68回大会（関西大学）にて発表された。

3）自己評定に用いられた形容詞には，女性にとって望ましいことを示すかどうか曖昧な形容詞が含まれている（e.g.,「身長が高い」）。このような項目を自己評価の指標に含めるべきかどうかには議論があるかもしれない。しかし，15項目で高い内的整合性を示していること，項目を減らすことで事後的な選択のバイアスを犯してしまう可能性を回避することの２つの理由から，すべての項目を用いて自己評価の指標を作成することにした。

4）刺激人物の望ましさの各条件で用意した2種類のプロフィールをここではそれぞれ「込み」にして検討した。これにより，プロフィールの特異性による効果を排除することができると考えた。

引用文献

Anderson, N. H. 1968 Likableness ratings of 555 personality-trait words. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 272－279.

青木孝悦 1971 性格表現用語の心理辞典的研究－455語の選択，分類，および望ましさの評定－　心理学研究，**42**，1－13.

Berscheid, E., Dion, K., Walster, E., & Walster, G. W. 1971 Physical attractiveness and dating choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **7**, 173－189.

Beauregard, K. S., & Dunning, D. 1998 Turning up the contrast: Self-enhancement motives prompt egocentric contrast effects in social judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 606－621.

Buss, D. M. 1989 Sex differences in human mate preferences: Evolutionary hypotheses tested in 37 cultures. *Behavioral and Brain Sciences*, **12**, 1－49.

Buss, D. M. 1994 Mate preferences in 37 cultures. In W. J. Lonner & R. S. Malpass (Eds.), *Psychology and culture*. Boston: Allyn and Bacon. Pp.197－202.

Buss, D. M. 1999 *Evolutionary psychology: The new science of the mind*. Needham Heights, MA: Allyn & Bacon.

Buss, D. M., & Kenrick, D. T. 1998 Evolutionary social psychology. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey (eds.), *The handbook of social psychology (4th ed.)*: Vol.2. Boston: McGraw-Hill. Pp.982－1026.

Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.

Byrne, D., & Nelson, D. 1965 Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 659－663.

Cialdini, R. B., Borden, R. J., Thorne, A., Walker, M. R., Freeman, S., & Sloan, L. R. 1976 Basking in reflected glory: Three (football) field studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 366－375.

Feingold, A. 1988 Matching for attractiveness in romantic partner and same-sex friend: A meta-analysis and theoretical critique. *Psychological Bulletin*, **104**, 26－235.

Griffitt, R. B. 1966 Interpersonal attraction as a function of self-concept and personality similarity-dissimilarity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 581－584.

Hagiwara, S. 1975 Visual versus verbal information in impression formation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 692－698.

長谷川寿一・長谷川眞理子 2000 進化と人間行動　東京大学出版会

Heider, F. 1946 Attitudes and cognitive organization. *Journal of Psychology*, **21**, 107－112.

Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley. ハイダー，F. 大橋正夫（訳）1978 対人関係の心理学　誠信書房

Hendrick, C. & Brown, S. R. 1971 Introversion, extraversion and interpersonal attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **20**, 31－36.

平石　界 2000 進化心理学－理論と実証研究の紹介　認知科学，**7**，341－356.

Huston, T. L. 1973 Ambiguity of acceptance, social desirability and dating choice. *Journal of Experimental Social Psychology*, **9**, 32－42.

Kenrick, D. T., Groth, G. E., Trost, M. R., & Sadalla, E. K. 1993 Integrating evolutionary and social exchange perspectives on relationships: Effects of gender, self-appraisal, and involvement level on mate selection criteria. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 951－969.

北山　忍 1998 自己と感情－文化心理学による問いかけ　日本認知科学会（編）　認知科学モノグラフ 9　共立出版

北山　忍・高木浩人・松本寿弥 1995 日本的自己の文化心理学－Ⅰ　成功と失敗の帰因　心理学評論，**38**，247－280.

Landy, D., & Sigall, H. 1974 Beauty is talent: Task evaluation as a function of the performer's physical attractiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 299－304.

Markus, H. R. & Kitayama, S. 1991 Culture and the

self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224－253.

松井　豊 1991 対人魅力（異性に好かれる性格）　宮沢秀次・二宮克美・大野木裕明（編）　自分でできる心理学　ナカニシヤ出版

松井　豊・山本真理子 1985 異性交際の対象選択に及ぼす外見的印象と自己評価の影響　社会心理学研究，**1**，9－14.

Murstein, B. I. 1972 Physical attractiveness and marital choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **22**, 8－12.

中村雅彦 1984 性格の類似性が対人魅力に及ぼす効果　実験社会心理学研究，**23**，139－145.

中里浩明・井上　徹・田中国夫 1975 人格類似性と対人魅力－向性と欲求の次元－　心理学研究，**46**，109－117.

Newcomb, T. M. 1961 *The acquaintance process*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

沼崎　誠 2004 社会的認知と進化心理学　岡隆（編）　社会的認知研究のパースペクティブ：心と社会のインターフェイス　培風館　Pp.215－232.

奥田秀宇 1997 人をセレクション社会心理学17　人をひきつける心：対人魅力の社会心理学　サイエンス社

Shepherd, J. W., & Ellis, H. D. 1972 Physical attractiveness and selection of marriage partners. *Psychological Reports*, **30**, 1004.

Sigall, H., & Landy, D. 1973 Radiating beauty: Effects of having a physically attractive partner on person perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, **28**, 218－224.

Silverman, I. 1971 Physical attractivemess and courtship. *Sexual Behavior*, September, 22－25.

Swann, W. B., Jr., Stein-Seroussi, A., & Geisler, R. B. 1992 Why people self-verify. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 392－401.

詫摩武俊 1973 恋愛と結婚　依田新（編）　現代青年心理学講座 5　現代の青年の性意識　金子書房

Walster, E., Aronson, V., Abrahams, D., & Rottman, L. 1966 Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 509－516.

山本真理子・松井　豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，**30**，64－68.

（ふじしま　よしつぐ　　心理学科）